

◎市内足摺岬地区戦争遺跡測量調査を進める。

1月21日(木)・・・足摺岬地区カサバエ・「旧陸軍レーダー基地」測量

1月22日(金)・・・足摺岬地区足摺山・「旧海軍レーダー基地・銃砲台・弾薬庫」測量

市史編集委員出原恵三氏（平和資料館草の家副館長）と市史調査協力員大原純一氏（佐川町文化財審議委員・越知町文化財審議委員兼任）が今月21～22日の1泊2日の日程で来市し、足摺岬地区の旧陸軍及び海軍のレーダー基地・受信所・銃砲台・弾薬庫・兵舎など一連の戦争遺跡の測量調査を実施した。本来は2泊3日の予定であったが、天候の関係から1泊2日となった。故に本年度中に再度調査していただく予定。



※国土地理院発行2万5千分の1地形図「足摺岬」に加筆して引用

この調査では、昭和17年に足摺山上の頂上尾根付近にわずか3ヶ月くらいで急に造られた旧海軍レーダー基地の本部兵舎・レーダー設置基礎跡・受信所・待避壕・機銃砲台座・弾薬庫などの一連の施設について測量する。これにより足摺岬地区に残る戦争遺跡を『新土佐清水市史』に図面として留め、永久に保存・継承していくための基礎資料づくりを行うことがそのねらいである。何も平和教材は広島・長崎だけにあるのではない。市域にも戦争を伝える教材は、意識して探せばたくさんあるのだ。今回の調査では、次の方々にボランティアとして調査に参加していただいた。

土佐清水市郷土史同好会会長・武藤清氏（文化財審議委員・市史編集委員）

同会 副会長兼事務局長・西田和啓氏

同会 事務局次長(会計)・遠見早稲氏

同会 会員・弘田之彦氏（あしずり遍路道保存会会長）

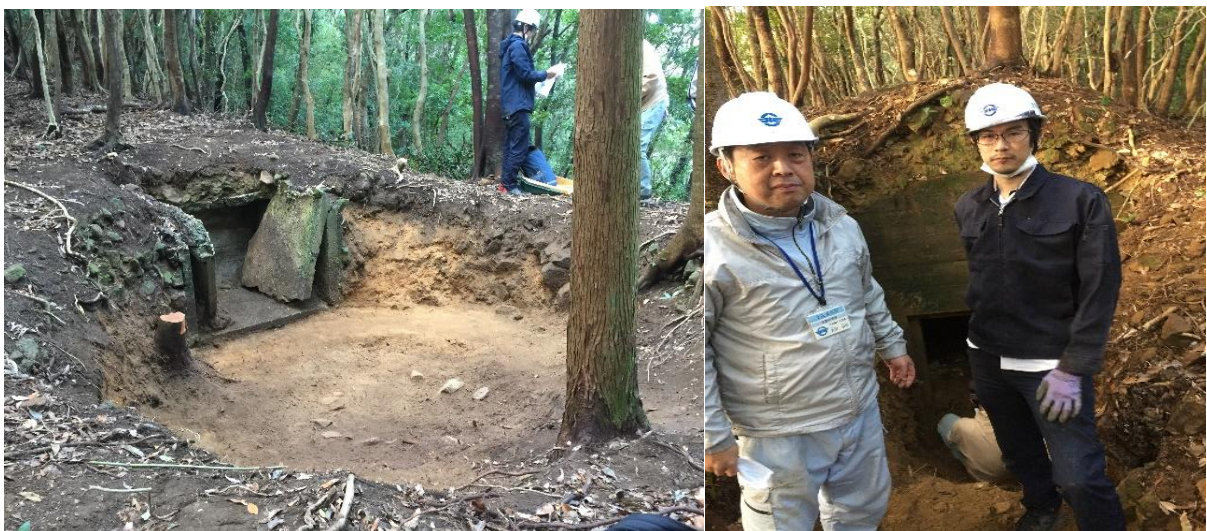
ご協力ありがとうございました。



↑ 足摺岬カサバエ地区の旧陸軍レーダー基地の埋土除去と測量調査の様子。
 左写真の左端は、大原純一氏(黄緑色ブレカー)、その右端は出原恵三氏、測量と記録
 を取り、その図面を『新市史』に掲載する予定。右写真は、陸軍レーダー基地全景。



← 足摺山の旧
 海軍レーダー
 基地受信所。
 経年により埋
 土が厚く堆積
 し、これを取
 り除き、内部
 の構造や入口
 のサイズを測
 量した。写真
 は埋土を除去
 する郷土史同
 好会西田和啓
 事務局長。



↑ 左写真は銃砲台座礎石と弾薬庫。

↑ 市史編さん室(田村、吉本)

「市史執筆のブレイクタイム(19)」

“小林為太郎”

市史編集委員長 田村公利

(1) 少年時代の為太郎

小林為太郎は、明治41年(1908)4月10日、父上岡岩吉と母マサノの三男として当時の幡多郡下川口村大津(現土佐清水市大津)に生まれた。小学校の頃より頭脳明晰であり、加えて曲がったことが大嫌いな正義感の強い少年であった。しかし、腕白でもあり、木のとっぺん付近に黒紫色の熟した棕の実があることを知り、上の方の細い枝に上り実を取ろうとした。そのとき枝が折れて落下。運悪く尖った石の上に額を打ち付けて出血。この傷は為太郎生涯のトレードマークとなる。

棕の木は、ニレ科ムクノキ属の落葉高木で晩秋に甘い小さな実を熟す。甘さに飢えた当時の少年らの格好のおやつになっていた。息子でタレントの上岡龍太郎氏によると、この額の傷跡について「おれもこの傷さえなければ、男前なんだが」と気にしていたという。

小学校時代、村の有力者子息と為太郎は、畑で遊んでいた。子ども同士のこと、そのうち相撲となり、夢中になって興じていたら野菜畑を荒らしてしまった。地主にこっぴどく叱責されたのは、貧困家庭の為太郎一方のみだった。富裕な家庭の有力者子息は怒られることはなかった。この社会的差別を為太郎は終生忘れなかった。少年時代の苦い思い出が彼の人生の方向性を決定づけた。彼は勉学に励むことにより、不条理な社会的差別と闘おうと心に誓う。

しかし、高等小学校を卒業した後、貧困のため進学することができず、18歳まで地元の三等郵便局に勤務したり、母を手伝い畑で芋を作ったり、天草取りやイカ釣りもした。その間、独学で小学校教員資格試験に3度挑むがいずれも失敗した。

(2) 郷里を離れて進学の道に

働きながら中学校に進学する決意をして大正15年(1926)3月、高知市に転出する。キリスト教系団体に運営されていた学生労働会に入り、牛乳配達をしながら自学する。この間、中村出身の幸徳秋水が大逆事件で刑死したこと、普通選挙法成立直後の大正デモクラシーの影響などを受け、マルクス主義に傾倒する。古本屋で幸徳秋水・堺利彦・大杉栄らの本を入手し、読み漁る。高知市に転出した年(1926)の8月、高知県立城北中学校(現在の高知県立小津高等学校)の2年生への編入試験に合格する。中学生となった為太郎は、学生労働会で実施されるキリスト教の礼拝を嫌い、賛美歌を歌わないためマークされ、反宗教的行動として咎められて学生労働会を追放された。しかし、「土陽新聞」を配達しながら中学校だけは続けて通学した。

昭和5年(1930)4月、旧制高知高校に入学した。1年時に弁論部に入部し、2年時に左翼系雑誌『戦旗』を講読して警察に検挙され、学校から謹慎処分となる。教員から「左翼運動を行わないならば学費を免除する手続きをしてやる」と言われるが、「青春と学費を引き換えにはできない」ときっぱりと拒絶した。

昭和8年(1933)4月、京都帝国大学法学部に入学する。まもなく滝川事件が起こる。京都大学教授・滝川幸辰の著書『刑法読本』



旧制高知高校時代の為太郎

や講義内容が社会主義思想であるとして当時の文部相・鳩山一郎が罷免を要求した。これを大学側が拒否すると文部省は滝川教授を休職処分とした。法学部教授会は、「不当処分と学問の自由」を主張して全員辞表を提出した。在学学生も抵抗したが文部省の強行に抵抗勢力は敗北し、佐々木惣一、末川博ら7人の教授の辞職をもってこの事件の幕引きがなされた。為太郎は、「学問の自由がないから大学教授を辞め、辞めた教授たちで自由な学園を創設する」という教授会の考えに反発し、これを敗北主義であると非難の演説を学内で行った。そして、貧しい学生のためにも辞めないで戦い抜いてほしい主張した。これがきっかけとなり、弁護士をめざすことを心に決意した。

(3) 民権派弁護士・小林為太郎の誕生

昭和11年(1936)、京都帝国大学を卒業し、一旦岐阜市役所に就職するが、勉強時間が取れないため、京都市の代用教員となる。翌・昭和12年、宮崎県の生糸問屋の一人娘・小林タマと結婚した。以後、小林家に養子に入り、小林姓を名乗る。刑法を研究するためにこの年、京都大学大学院に入学し、司法試験(当時は高等文官試験司法科)の勉強を続けた。昭和14年(1939)4月に熊本県に所在していた第六騎兵連隊に臨時招集され、徴兵検査を受けたが体重超過により入隊が見送られた。当時体重が25貫(約94キログラム)の巨漢であったことが幸いし、入隊を免れた。



昭和15年(1940)、念願の司法試験に合格し、大阪弁護士会の高山義三(後に京都市長となる)の法律事務所に試補として就職した。昭和17年(1941)3月には、長男上岡龍太郎が誕生し、7月に大阪弁護士会登録した。昭和19年(1944)10月、家族を宮崎の妻の実家に疎開させた。終戦直後、京都弁護士会に登録を変更して京都市内に事務所を開設した。

京都法曹界で活躍することになった為太郎は、同じ弁護士能勢克男(1894—1979)らと共に市民・労働者・学生・農民・在日朝鮮人などに対する弾圧、人権抑圧に関わる事件を一手に引き受け、弁護活動を行った。その弁護活動の範囲は京都府に留まらず、滋賀県や福井県にも及んだ。弁護料が支払えない依頼者に対しては、お金があるときでよいとし、交通費なども自費で弁護活動を行うことがあった。「貧乏人から金は取らん」と言い切り、人間味のある弁護士として多くの人々から敬愛された。その豪放磊落な風貌と毒舌の小林節は司法界でも有名であった。

また、政界進出にも意欲を見せた。戦後初めての総選挙が昭和21年(1946)4月に実施され、京都全府一区(大選挙区)に出馬した。その選挙資金は、妻の実家である宮崎県の小林家所有の宅地を売り払って用意した。しかし、力及ばず落選。次の総選挙にも再出馬したがあえなく落選。ついに政界に進出することはなかった。

(4) 為太郎の遺言「遺骨を叶崎の海に散布してくれ！」

昭和29年(1954)7月、戦前・戦中・戦後と苦楽をともにした伴侶・タマが乳癌のため逝去した。為太郎46歳のときのことである。長男龍太郎は12歳、まだ母と別れるにはあまりにも早過ぎる歳であった。その後、鈴子と再婚している。

昭和42年(1967)から当時の上岡茂晴校長、横山進一教頭らによって閉校間際ま



叶崎から見た足摺半島西部（遠く見える右端は白碕）

で発行され続けた「叶崎便り」。ここに小林為太郎の氏名がよく掲載されている。為太郎は、母校大津小学校に図書を何年にもわたり寄贈した。同校が小規模校の割に学校図書の保有数が多いのはこのためである。図書館がなかったので、校舎北側の講堂に衝立を構え、臨時図書スペースをなんとか確保し、「小林文庫」と命名した。また、為太郎は、京阪方面に郷里から出てきた人々の面倒をよくみた。飯を食べさせ、就職の世話をして温かく包んだ。どこまでも大津を愛した男であった。

昭和60年（1985）11月12日、炬燵に入り大相撲中継をテレビ観戦していた為太郎はそこで臨終（享年77歳）。最後の言葉は、「朝潮（現高砂親方）が勝った」……。

翌年7月、為太郎の家族が郷里・大津を訪れた。生前の為太郎が「遺骨の一部を叶崎の荒波に流してくれ！」と遺言しており、その思いを果たすため家族は叶崎に立った。灯台下の岩場には波が激しく打ち寄せ、白波が立っていた。為太郎の遺骨（一部）は故郷・大津の海に帰り、永久の眠りについた。

為太郎の学問・教育に対する情熱、社会の不条理や矛盾への憤り、庶民感覚から乖離した権威や権力と戦った不撓不屈の意志、その高い精神性は、故郷の山や川、大海原で少年時代に育まれたものであろう。幾年にもわたる母校への図書寄贈は、その故郷に対する為太郎の感謝の思いだったのではないだろうか。

参考文献

- ・上岡忠紀「小林為太郎さんを忍ぶ」（「叶崎便り第67号」大津小学校、1990年）
- ・浅井清信他『いごっそう弁護士為さん 小林為太郎遺稿・追悼集』小林為太郎遺稿・追悼文集編集委員会、1986年。

〔編集後記〕本年度もあと残りわずか。「光陰矢の如し」。焦らず、しかし、着実に執筆をお願いします。ただし、コロナ禍真っ只中、健康にはくれぐれもご用心ください。かけがえのない一人一人です。（田村）